

5-アミノレブリン酸(ALA)含有肥料 アラガーデン・シリーズの詳細説明

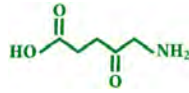


アラガーデン・ファーム

アラガーデン・ファーム
【即溶】

アラガーデンVFF

特許技術



5-アミノレブリン酸(ALA)

SHK 清和肥料工業株式会社

Copyright 2017-2023 Seiwa Fertilizer Ind. Co., LTD All rights reserved

コスモエネルギーグループは、アミノレブリン酸(以後ALAと表記)を植物にごく微量与えると顕著な生育促進効果のあることを発見、世界で初めてALAの農業利用を実用化しました。2020年には弊社が、特許を含むALAの農業利用に関する長年の研究成果を譲り受け、世界初となるALA入り化成肥料やALA入り液体肥料の製造販売を手がけております。ALAは、すべての生物細胞に共通して含まれる物質の一つです。植物がALAを吸収すると、

- ・気孔を開くことで、養水分の吸収と光合成を促進
- ・植物体内の窒素代謝を促進し、窒素利用効率を高める
- ・葉緑素の増加と光合成の促進
- ・根の生育促進
- ・寡照耐性、耐寒性、耐塩性の向上

これらの作用により様々な施用効果が発現します。

今のところALA入りの粒状肥料を製造できるのは弊社だけです。

非常に高濃度のALAを植物に処理すると強い生育阻害が生じます。しかし、プラスの効果を実現量と、阻害が現れる量の差が桁違いに大きく、通常の施肥量では害を伴うことはありません。ご安心下さい。

※ALAは一般的には蛋白構成アミノ酸の一つであるアラニンの略号ですが、アミノレブリン酸もALAと呼ばれています。

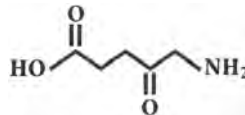


ALA(アミノレブリン酸)って?

1

5-アミノレブリン酸

5-Amino Levulinic Acid → 略してALA



植物体内では

硝酸→亜硝酸→アンモニア→グルタミン酸→ALA

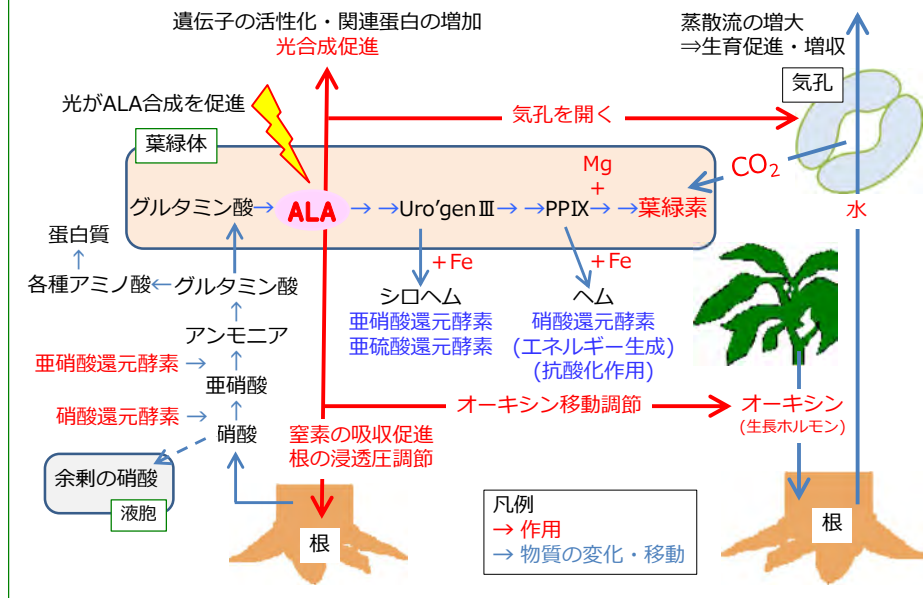
※グルタミン酸：窒素代謝の最初に作られるアミノ酸

- ・全ての生物細胞中に普遍的に存在する遊離アミノ酸
 - ※蛋白質を構成するアミノ酸ではない
 - ※多くの生理作用に関係する大変重要な物質です
- ・葉緑素や窒素代謝関連酵素の前駆物質
- ・気孔開度、窒素吸収と代謝、光合成、根の生育、根浸透圧調節等に関与する
 - 微量のALA → 生育促進・増収・耐寒性・寡照耐性
- ・植物以外にも、幅広い分野で注目されている機能性成分です

ALA(アミノレブリン酸)とはアミノ酸の一種ですが、蛋白質を構成するアミノ酸ではありません。細胞内に存在する遊離アミノ酸と呼ばれている物質の一つです。36億年前の生命創生期から地球に存在し、人や動物、植物、微生物を問わず普遍的に細胞内に存在しています。高等植物に含まれるALAは、50nmol(0.0066ppm)以下(K. Naitoら1980、A. K. Stbartら1984)というごく微量ですが、多くの重要な生理作用を担う物質です。

ALAは、窒素代謝のごく初期の段階、グルタミン酸というアミノ酸から合成されています(S. I. Beale & P. A. Castelfranco, 1974、S. I. Bealeら1975)。ALAは、様々な形を変えながら葉緑素やヘム、酵素、ビタミンB₁₂などに変化していきます。ALAが8個集まりマグネシウムが結合するとクロロフィル(葉緑素)となります。鉄が結合するとヘムやシロヘムという物質になります。ヘム化合物には多数の物質が存在していますが、生物が生きていくためになくならない物質です。例えば、赤血球中のヘモグロビンが有名です。植物では、窒素や硫黄の代謝、抗酸化作用、エネルギー代謝等に関する重要な物質が含まれています。

ALAは、気孔を開く、窒素の吸収と代謝の促進、光合成促進、根の浸透圧調節、根の生育促進等に関与していることが明らかにされています。植物に微量のALAを与えると植物の代謝が向上し、ALA合成も円滑に行われるようになります。代謝活性の高い状態が一定期間持続され、生育が改善されると考えられています。近年は、様々な分野でALAの作用が注目され、医薬や食品分野でも一部実用化が始まっており、広く注目されている機能性成分です。次のスライドからALAの作用を詳しくみていきます。



ALAは、葉緑体中でグルタミン酸(窒素代謝における最初のアミノ酸)から合成されています。ALAは、多くの段階を経てプロトプロフィリンIX (PPIX) という物質を経て、マグネシウムが結合、クロロフィル(葉緑素)となります。一方で、PPIXは鉄と結合することでシトクロムなどのヘムとなります。ヘムは、人のヘモグロビンが有名ですが、植物では、エネルギー生成や抗酸化作用に関係する酵素や硝酸還元酵素になります。ALAがPPIXや葉緑素となる手前にあるウロプロフィリノーゲンIII (Uro'gen III) という物質に鉄が結合してシロヘムとなります。シロヘムは亜硝酸還元酵素や亜硫酸還元酵素として窒素や硫黄の代謝に関与しています。植物は一般に硝酸という形で窒素を吸収し、硝酸→亜硝酸→アンモニアと変化し、グルタミン酸というアミノ酸を経て、種々のアミノ酸、蛋白質へと代謝されていきます。窒素代謝の最初である硝酸からアンモニアへの変化が、窒素代謝全体を律速していると言われていています。ALAを発端として合成された硝酸(亜硝酸)還元酵素が活躍することで、作物体中の硝酸濃度が低下することが報告されています。アンモニア生成から始まるアミノ酸合成には、原料となる炭素源(糖)が必要ですが、幸いALAは光合成を活発にする働きをしますから、アミノ酸合成への原料供給も円滑に行われます。

一方でALAは気孔を開く作用をします。気孔が開けば、蒸散流の増加によって、水や養分の吸収が良くなります。気孔が開けば、光合成の原料であるCO₂の取込も良くなり、光合成が活発に行われるようになります。それらの結果、生育を改善したり、植物体の水分生理や草姿の改善にも役立つと考えられています。

ALAは、生長点で作られるオキシシンという生長ホルモンの輸送を調節し、根の生育を促していることも報告されています。

植物にALAが与えられると、体内の代謝活性が上がり、植物は根から吸収した窒素を原料にALAを円滑に合成できるようになります。ALAによって“やる気スイッチ”がONになった植物は、一定期間、代謝活性の高い状態が維持されると考えられます。

気孔を開く、根の浸透圧調節

- CO₂の供給 (光合成)
- 蒸散量増加 → 養水分の吸収促進
 - 葉温低下(期待)・草姿改善(水稻)
 - 水分生理調節・過湿に強い(可能性)
- 塩類濃度障害の軽減

光合成促進 (CO₂供給・葉緑素・関連蛋白・関連遺伝子発現)

窒素の吸収と代謝の促進

オキシシン(生長ホルモン)移行量増 → 根の伸長促進



- ・ 顕著な生育促進・増収・収穫期の前進
- ・ 根の顕著な生育促進
- ・ 低温・寡照・塩類障害など環境ストレス耐性向上

ALAは、多くの重要な生理に関係しています。植物に対するALAの施用効果は、概ね次のような生理作用から説明することができると考えられています。

- ・ 気孔開度を上げる (気孔を開く)
- ・ 光合成促進
- ・ 窒素吸収の促進と窒素代謝活性の向上
- ・ 根の伸長促進と根の浸透圧調節
- ・ 様々な環境ストレスに対する耐性の向上

ごく微量のALAを植物に与えると、気孔を開きやすくすることが証明され、詳しいメカニズムも徐々に分かって来ました。気孔が開くと蒸散流が増加、水の吸収が良くなります。同時に光合成の原料であるCO₂の取込が円滑になり、光合成が活発に行われるようになります。ALAは光合成関連遺伝子の活性化や関連蛋白質の増加、葉緑素の増加(分解抑制)による光合成促進なども報告されています。同時にALAは呼吸を抑制する働きをします。呼吸は植物が生存するためのエネルギーを得る重要な作用であると同時に光合成産物の消費であるとみることができます。生産増、消費減、その結果同化産物の蓄積が増え、生育が良くなります。水や窒素などの養水分吸収促進、窒素代謝促進、根の浸透圧調節機能、根の生育促進機能などによって、生育の改善、増収、寡照、低温、高塩類濃度、湿害(体内水分調節機能?)等、様々な環境に対する耐性が向上されることが報告されています。反面、施用時期によっては花芽形成や成熟(色抜け)が幾分遅れることがあり、早期米の追肥施用などでは注意が必要です。

SHK 気孔を適度に開いておくことの重要性 4

群落内の光の強さは一日中変化している
(秒・分単位で強さが変わっている)
変化する光環境下では気孔開度が光合成を律速している
気孔を開くのに時間がかかる = 環境変化に追いつかない



光合成能力が十分発揮されていない

気孔を開く = CO₂吸収増
気孔を開く = 蒸散増 = 養水分吸収の原動力
↓
気孔を開きやすくする = 生産性アップ

木村遼希・寺島一郎・矢守 航：光合成研究、28、29-38、2018
矢守 航：日本バイオスティミュラント協議会講演要旨、2019年12月16日

植物は光合成によって生育に必要な炭水化物(糖)を生産しています。光合成速度は温度、二酸化炭素濃度、光の強さに影響されます。晴天の日であっても、群落内の光量は思いの外変動しています。秒、分の単位で変化し、そのことが気孔の開閉にも影響しています。一旦閉じた気孔が開くためには30分から1時間もかかる場合があります。光量は非常に短い時間間隔で変化しているため、光量の変化に気孔の開閉速度が追いつきません。**変動する光環境下では気孔開度が光合成の律速になっている**と言われてしています。光が強くなっても気孔が開ききっていないために、十分に二酸化炭素を吸収できません。環境が常に変化している自然環境では植物が本来有している光合成能力が十分発揮されていません。気孔が開けば蒸散量も増加します。蒸散は養水分吸収の原動力です。気孔が開きやすい変異体は、光合成能が高く維持され、生産性が上がることが報告されており、多収水稻の育成にも利用されています。干ばつ下の植物はアブシジン酸(ABA)というホルモンを作り、気孔を閉じることで水不足に対応します。ALAは気孔を開くのと同時に根の吸水力を上げ、根の浸透圧を高めることで水を吸いやすくする作用をします。気孔を開きっぱなしにすると水不足による生育停滞を招きそうですが、危機的状況になってまで植物が手をこまねいているとは考えられません。管理された圃場では、極端な干ばつが頻発することはないでしょう。**適度に気孔を開いておくことは、作物の生産性の向上に有利**だと考えられます。水稻の午睡(午後気孔が閉じることで光合成が低下する現象)の軽減にも寄与すると考えられます。

SHK アラガーデン・ファーム(種肥) 5



20kgポリ袋入り
生第106170号
N-P-K
10-10-10

- ALA入りN-P-K=10-10-10のタブレット型肥料
- 普段の肥料に10%程度混合して使用する
- 工場で予め混合したアラガーデン・ファームBBも
- 本製品2~3kg/10a局所施用(条施)
2~3g(50~60粒)/m²
- イチゴ：通常の肥料+0.5~1g/株(10~20粒)
子苗には3~4粒/株
- 水稻には穂肥での施用が効果的(早期米は避ける)
2kg/10aのドローン散布またはBB515で穂肥
- 施肥後速やかに根と接触できることが重要
- 施肥後のALA吸収可能期間は約20日と考えられる
- 効果は2~3ヶ月継続すると考えられる
- 作物や施用時期によっては花芽形成や成熟が若干遅れる場合がある
- クエン酸が土壌中のリン・鉄・苦土等を可溶化
- 保管は高温と湿気を避ける

アラガーデン・ファームは、窒素・りん酸・加里をそれぞれ10%づつ含む化成肥料(タブレット型肥料)です。肥料における通常施用濃度の10倍以上のALAを含有する、高濃度ALA入り肥料です。これを私たちは「種肥」と呼んでおり、他の肥料に重量比で10%程度混合して使用する肥料です。単独で施用しても肥焼けしない量なら何ら問題はありません。本圃の元肥や追肥で使う場合、本製品を3~5kg/10a条施用すればALAの効果が得られます。アラガーデン・ファーム施用量に応じた適量の肥料とともに施用することも重要です。水稻では2kg/10aを出穂前後にドローン散布、または後述のアラガーデン・ファームBB515(15-1-15)で穂肥を行うのが効果的です。鉄やマグネシウムの存在がALAの施用効果を高めます。本製品にはクエン酸を含有しています。クエン酸は土壌中の鉄やリンのほかマグネシウムなどの溶解を助け、植物による吸収を手助けします。アラガーデン・ファームと一緒に硫酸苦土肥料を施用するとALAの施用効果を得やすくなります。土壌に施用されたALAは、20日程度で分解します。根の近くに施用するために局所施肥(条施や株元施肥)を行ってください。製品中でのALAはごくゆっくりと分解していきますが、正しく保管されていれば、特に有効期限を気にする必要はありません。ただし、**製品の水分が多くなるとALAの分解が促進**されます。高温もALAの分解を早めます。一度開封した製品は、出来る限り使い切るようにし、**保管中に湿気を吸収しないように気をつけていただく必要があります。**



アラガーデン・ファーム【即溶】

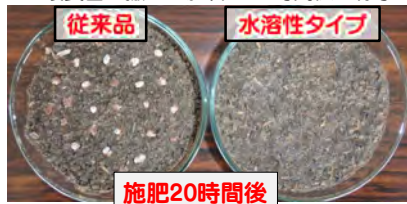
6



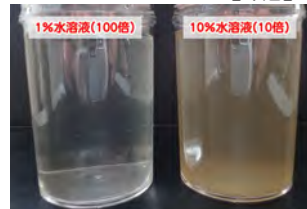
20kgポリ袋入り
生第106295号
N-P-K=14-6-10

- ・化成肥料なのに**水溶性**(水不溶解物0.2~0.5%)
- ・AN14-WP6-WK10%
- ・1回の標準施肥量は10kg/10aを株元に**元肥、追肥とも**に使える
- ・速効性肥料として追肥に活用
ALAと窒素を速やかに根に供給
- ・10kg/10aを2,000~3,000Lの水に溶かして**チューブ灌水すれば省力的**
- ・クエン酸を増量(10-10-10比較)
- ・保管は**高温と湿気を避ける**

土壤表面に撒いた肥料の20時間後の様子

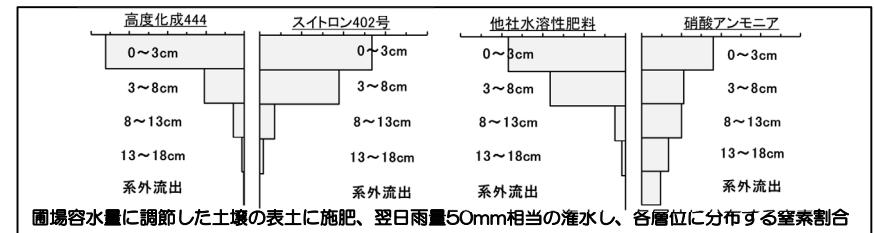


アラガーデン・ファーム【即溶】



アラガーデン・ファーム【即溶】は、アラガーデン・ファーム10-10-10(種肥)に比べ、ALA濃度を1/5にし、そのまま使っていただくことを前提とした製品です。追肥を主体に、一度に10kg/10a程度施用して下さい。最大の特徴は、粒状の化成肥料でありながら水溶性の肥料であることです。水によく溶けます。低温期でも土壌水分で速やかに溶解し、肥料成分とALAを速やかに根に届けることができます。10kg/10aの本製品を1,000~3,000リットルの水に溶かしてチューブ灌水施肥していただくこともできます。1,000~500倍くらいに希釈すれば葉面散布にも使っていただくことが出来ます。苦土、鉄を含む液肥(M1000等)を混用するとより効果的です。一般の化成肥料と同じ設備で製造しているため、僅かながら溶け残りが出来ます。**必ずストレーナーなどで濾過してからご使用ください。**まれに、各粒の色合いが若干異なることで、斑になっていたり、ロットによって粒の色が異なることがありますが、製品品質には全く問題ありません。

下の図は本製品と同様の原料と製法で作られたスイトロン402号という化成肥料での試験結果ですが、本製品でも同様な結果が得られると考えています。土壤吸着性のない硝酸性窒素を半分含む硝安には及びませんが、他社水溶性化成肥料と同等もしくはそれ以上の土壤浸透性を示しました。



アラガーデンVFF

7



生第106168号

アラガーデンVFFはすべての作物に使える**ALA入り液肥**使用方法

- ・3,000~4,000倍希釈液を茎葉散布(散布液量が100L/10a以下の時は2,500~3,000倍)
- ・50~80mL/10aを必要量の水に希釈して、土壤灌水
- ・1~2週間間隔
- ・10,000~20,000倍で灌水代わりに施用する
- ・他の液肥や多くの農薬と混合施用可
- ・花芽形成直前の散布は避ける
- ・肥料の吸収が活発になるので不足しないように
- ・**土壤が乾燥しているときの茎葉散布厳禁(前日に灌水)**

	窒素全量	硝酸性窒素	水溶性りん酸	水溶性加里	水溶性苦土	マンガン
VFF	8.0	2.4	5.0	3.0	3.0	0.15
	ほう素	鉄	亜鉛	銅	モリブデン	包装単位
VFF	0.22	0.29	0.07	0.01	0.01	1L×10

アラガーデンVFFは、一般農作物を対象としたALA入り液体肥料です。窒素-りん酸-加里-苦土=8-5-3-3に微量元素を含有しています。一般的には3,000~4,000倍(微量散布は2,500倍)程度に希釈して茎葉散布、10a当たり50~80ミリリットルを必要量の水で希釈、株元またはチューブ等で灌水同時施肥をしてください。特にイチゴなど窒素に敏感な作物では、10,000~20,000倍に希釈して、朝一番に水やり代わりに継続使用していただく方法もございます。希釈に用いる用水のpHが概ね7.5を越える場合はクエン酸で中和してから使用してください。

土壤が乾燥している状態で茎葉散布すると、特に散布濃度が高い場合薬害を生じる恐れがあります。前日に灌水してから散布してください。特に高温期の日中散布も控えてください。夕方より早朝散布の方が効果が高いようです。他の液肥との混用や多くの農薬との混用もできます。アルカリ性の液肥や農薬との混用はできません。無機銅剤とも混用できません(有機銅剤は可)。一般の液肥と混用する場合は、まず一般の液肥を所定倍率に希釈し、その後に**アラガーデンVFFを加えてください。**

ALAは窒素代謝を促進し、窒素肥料が良く効くようになります。そのため、花芽形成直前に施用すると、まれに花芽の形成が若干遅れることがありますので注意して下さい。また、水や肥料の吸収が活発になるので肥料不足を招かないように施肥して下さい。

レタス苗では10~20倍希釈液の散布(ドローンより散布液量が多い)では薬害を生じたため、ドローン散布(16~20倍・8L/ha)における薬害リスクを否定できませんので、今のところドローン散布は推奨しておりません。

強酸性の液肥です。原液を手などに触れないようにし、散布後の機械、器具の洗浄を丁寧に行ってください。



ALAの効果をも高めるポイント

8

1. **作物の根に近い部分に施用する**
施肥後速やかにALAと根が接触出来るように配慮する。
定植直前の植え位置にすじ撒き、または株元に施用する。
2. **苦土や鉄の施用は効果をも高める**
タブレット・液肥施用時にハーモニー(粒状硫酸苦土肥料)等と一緒に施すと効果が高い。
3. アラガーデン・ファーム【即溶】を液肥を使用する場合は、エムセン(苦土・鉄・微量要素入り液肥)等を混用する。
4. 水稲ではアラガーデン・ファームBB515などで出穂10日前を目処に施用する(種肥2kg/10aをドローン散布)。
元肥では側条施肥とし、暖地では過剰分げつを招く恐れ。
5. 養分吸収増大時期や追肥のタイミングで施用する。
麦の元肥に施用しても十分な効果は得られません。
作物ごとの使い方は別紙を参照。

ALA入り肥料の効果をも高めるポイントは、

1. 粒状肥料(タブレット)はできる限り根に近い部分に施用し、根とALAが出来る限り速やかに接触できるように配慮することが重要です。ALAは土壌中では分解します。施肥後のALA吸収可能期間は20日間程度です。定植直前に植え位置にすじ撒きする、追肥で株元に施用するなどの工夫が効果をも高めるポイントです。いわゆる待ち肥などには不適です。
2. ALAは葉緑素や硝酸・亜硝酸還元酵素の原料です。苦土や鉄と一緒に施すと効果をも高めることができます。粒状肥料(タブレット)はもちろん、液肥でも硫酸苦土肥料(例えば弊社のハーモニー)を同時に施用すると良い結果が得られています。
※塩基性の苦土肥料(苦土石灰や水酸化苦土等)は避けてください。
3. アラガーデン・ファーム【即溶】を液肥として使う場合は、苦土や鉄を含む液肥(例えば弊社のエムセン)を混用してください。
4. 水稲では穂肥での施用が一般的です。施用時期は出穂10日前、または2回目の追肥に使用してください。元肥で施用する場合は、必ず側条施肥とし、寒地や疎植栽培に使用し、暖地では過剰分げつを招く恐れがありますから避けた方が良いでしょう。
5. アラガーデン・シリーズを施用する時期は、定植直前、養分吸収増大期、追肥のタイミング等で施用してください。
秋まきコムギの元肥に施用しても十分な効果は得られません。水稲の遅い施用は、成熟が若干遅れる場合があり、極早生には控えて下さい。



ALA入り肥料のドローン散布(水稲)

9

- アラガーデン・ファーム(種肥)のドローンによる散布は安全で省力的
- 一発肥料等を使っても窒素量を勘案する必要がない
(2kg/10aの施用で窒素0.2kg/10a相当)
- 水田では少量施用でもALAの効果が広がりやすいと考えられる
- VFF50mL/10aを施用するためには10~20倍程度に希釈する必要がある
・・・水稲では一過性の葉斑を生じた



VFFの10倍希釈液を約20リットル/10a散布5日後の水稲(2021年島根県)



アラガーデン・ファームのドローンによる水稲出穂前散布事例(三重県2020年)
3kg/10aを施用し、穂肥なしでも通常以上の収量が得られた

ドローンを用いた施肥は、大面積を省力的に散布できることから、近年少しづつ広がりをみせています。水稲に対する出穂前後のALA散布の有効性は多くの試験によって実証されています。特に近年は一発型肥料が普及し、穂肥を施用する機会も減少しています。ドローン散布の最大の欠点は、一度に施用できる肥料の量が極端に少なく、高濃度での散布が必要なことです。アラガーデン・ファームは高濃度ALA含有肥料であることから、ドローンによる少量散布に適した肥料だと考えています。幸いにも水田には水が溜まっていることから、水に溶けやすいALAは容易に圃場全体に広がります。アラガーデン・ファームBB515による穂肥では、通常10kg/10a(アラガーデン・ファーム1.2kg/10a相当)施用されます。そこで、ドローンを用いてアラガーデン・ファームを2~3kg/10a程度施用すれば効果が得られます。島根県で行った試験では、ドローン散布ではありませんが、アラガーデン・ファームを3kg/10a施用したところ、施用後数日で葉色の亢進がみられ、玄米収量が増加しました。

液肥であるアラガーデンVFFのドローンによる茎葉散布については、1回当たりの液肥必要量から考えて、10~20倍希釈となります。レタス苗を用いた試験では50倍程度で濃度障害がみられました。水稲による圃場試験では、10または20倍希釈液を20~25リットル/10a散布したところ、上位葉に一過性の葉斑を生じました。症状は収穫まで回復することはありませんでしたが、新しく出た葉に異常はなく、その後の生育にも影響は見られませんでした。玄米の収量についても同様で、アラガーデンVFF散布区は、増収傾向にありました。これらのことをご理解いただいた上でご使用いただきますようお願いいたします。

富山県でのネギに対するアラガーデン・ファーム施用試験4年間のまとめ

試験年次	生産者	ALA無施用区を100としたALA施用区の生体重指数			
		ALA無施用	アラガーデン・ファーム(種肥3kg/10a)		ALA入り一発
			定植時施用	追肥	
2016年	A	100	137		
2017年	A	100	116		
	B	100		219	
2018年	A	100	101		126
	B	100	129		133
	C	100		118	113
	2018年平均	100	115	118	124
2019年	B	100	126		130
	C	100			101
	D	100			128
	E	100			105
	2019年平均	100	126		116
	4年間の平均	100	122	169	119

種肥
6kg/10a

種肥
3.6kg/10a

富山県で行ったALA入り肥料のネギに対する施用試験の結果を紹介します。定植直前にアラガーデン・ファーム3kg/10aを定植位置に条施用した場合、または1回目の土寄せ時に3kg/10aを追肥した場合ともにALAによる生育促進作用が認められました。

2018年からは、省力化のためにアラガーデン・ファームを6~10%混合した一発肥料を試作し、元肥で60kg/10a施用しました。定植時アラガーデン・ファーム単独施肥、アラガーデン・ファーム単独追肥と同等の増収効果が認められました。2020年には福井県でもALA入り一発肥料の高い施用効果が確認されました。

大分県でも同様な試験を行い、顕著な根の生育促進効果が確認されました(下の写真)。



ALA区：平均生体重228.7g 慣行区：平均生体重104.3g

富山県での試験例(2017年) 種肥3kg/10a追肥1回

大分県での試験例

ダイズ(トヨムスメ)に対するALA液肥散布効果

試験区	節数/株	莢数/株	百粒重g	粒重g/m ²	粒莖比%
無処理	28.6	58.1	31.4	385(100)	99.4
開花始期3回散布	30.1	59.8	32.0	411(107)	100.8
開花終期3回散布	33.0	63.4	31.8	437(114)	114.4
有意差	*	**	ns	**	**

CSA液肥1号、5,000倍液250リットル/10aを3回
開花始期散布：7月16日から7日間隔3回散布
開花終期散布：7月30日から7日間隔3回散布

**ALA処理直後から生育が良くなった
光合成生産量の増加による**

王・由田：日作紀、74、別1、176-178(2005)

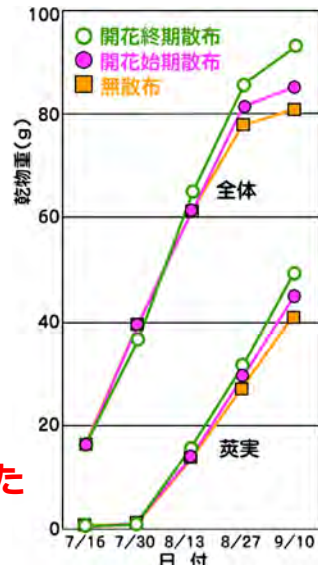


図 個体乾物重の推移

北海道大学で行われたダイズ(品種トヨムスメ)に対するALA入り液肥の散布効果をみた試験結果を紹介します。

ALA液肥を散布すると莢数の増加による増収効果が得られました。個体群生長速度(CGR、1日当たりの乾物増加量)は、ALA入り液肥散布直後から増加しました。散布直後から生長速度が速くなり、大きくなったということです。生長速度の増加は、葉面積指数(mLAI、一定面積当たりの葉の総面積)の増加ではなく、純同化率(NAR、1日当たりの光合成生産量)が増加することで生長速度が増加しました。ALAの施用によって、光合成が促進された結果、生育が改善されたと考えられます。

ALA入り液肥の開花始期3回散布によって7%増収、開花終期3回の散布によって14%増収しました。

ダイズ乾物生産に関するパラメーターの推移

期間	葉面積指数(mLAI、m ² /m ²)			純同化率(NAR、g/m ² /日)			個体群生長速度(CGR、g/m ² /日)		
	I	II	III	I	II	III	I	II	III
無処理	3.44	4.28	3.82	4.74	4.22	3.70	16.33	18.07	14.12
開花始期	3.59	4.30	3.78	5.17	4.02	4.35	18.58	17.25	16.46
開花終期		4.24	4.08		5.32	4.06		22.54	16.54

期間： I、7月16~30日 II、7月30日~8月13日 III、8月13~27日



直播水稻に対するALAの効果

12

アラガーデンVFF散布効果(霞田・渡辺(2011):北陸作物学会報、46、30-33)

品 種	試験区	籾重 g/株	藁重 g/株	穂数 /m ²	籾数 /m ²	登熟歩合(%)	
						強勢えい果	弱勢えい果
コシヒカリ (4/30播種)	対照区	51	48	1,839	33,470	82.7±3.0b	54.9±2.1b
	ALA区	52	49	1,806	32,860	88.8±2.8a	84.8±4.6a
てんこもり (5/2播種)	対照区	45	48	1,654	30,103	94.0±3.3a	79.8±4.4b
	ALA区	46	51	1,786	32,504	95.7±1.4a	93.4±1.5a

品 種	試験区	玄米千粒重 (g)	理論玄米収量 (kg/10a)	玄米白 度	蛋白質	アミロース	評価値
コシヒカリ	対照区	22.0±0.5	506.6 (100)	19.1	6.1	18.7	73
	ALA区	22.0±0.5	627.5 (124)	19.2	5.9	18.7	74
てんこもり	対照区	22.3±0.3	583.3 (100)	18.9	6.0	18.9	74
	ALA区	23.7±0.5	728.8 (125)	19.0	6.0	19.0	75

液肥散布：コシヒカリ(8月16日と8月23日)、てんこもり(8月23日と9月6日)
 100g/200リットル/10a (容積比で約2,500倍液)
 収 穫：コシヒカリ(9月16日)、てんこもり(9月26日)
 強勢えい果：一次枝梗の全籾と二次枝梗先端籾 弱勢えい果：二次枝梗先端籾以外



移植水稻に対するALAの効果

13

穂肥(アラガーデン・ファームBB515)の施用効果 (2015年・富山県・コシヒカリ)

処理	わら重g/株	1穂籾数	穂数/m ²	籾数/m ²	登熟歩合	千粒重	収量kg/10a
対照	46.0	80.9	382	30,893	89.3	23.0	635(100)
ALA	53.0	72.1	461	33,221	92.5	23.6	725(114)

穂肥 (アラガーデン・ファームBB515) の施用効果 (2016年・富山県)

品 種	穂肥(N-P-K施肥量kg/10a)	精玄米重kg/10a	同左平均
コシヒカリ	ALA・BB515(1.50-0.10-1.50)	701	702(115)
	ALA・BB515(1.50-0.10-1.50)	702	
	慣行肥料(2.10-0.45-1.95)	630	610(100)
てんこもり	ALA・BB515(2.25-0.15-2.25)	651	651(106)
	慣行肥料(2.10-0.45-1.95)	613	
	慣行肥料(2.10-0.45-1.95)	616	615(100)

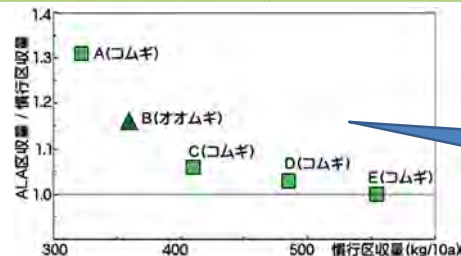
アラガーデン・ファーム(10-10-10、種肥)として1.2~1.8kg/10aです
 アラガーデン・ファーム2kg/10aドローン散布は省力で効果的



麦類(秋まき)に対するALAの効果

14

試験地	品 種	処 理	収量(kg/10a)	蛋白質
A (福岡)	コムギ (チクゴイズミ)	慣行区	322 (100)	9.0%
		ALA肥料・追肥1回	423 (131)	8.6%
B (富山)	オオムギ (ファイバースノー)	慣行区	360(100)	7.6%
		ALA肥料・追肥1回	418(116)	7.4%
C (福岡)	コムギ (チクゴイズミ)	慣行区	410 (100)	
		ALA肥料・追肥1回	435 (106)	
D (福岡)	コムギ (筑紫2号)	慣行区	485 (100)	13.5%
		ALA肥料・追肥2回+ALA液肥50g×3回散布	510 (103)	13.3%
E (福岡)	コムギ (シロガネ)	慣行区	554 (100)	10.7%
		ALA肥料・追肥1回+ALA液肥50g×3回散布	555 (100)	10.8%



ALA肥料：慣行肥料にアラガーデン・ファーム(10-10-10)を2kg/10a追加
 ALA液肥：ALA-N9.5-K1.2-Mg5.4-微量元素
 ALA濃度はVFFと同じ

ALAによる過湿害軽減
(可能性)

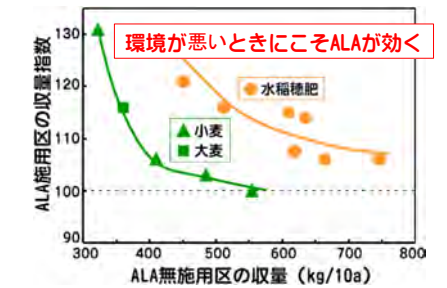
スライド12は、直播水稻の出穂後に2回アラガーデンVFFを散布した事例です。大きな増収効果が得られましたが、普段米粒になりにくい弱勢えい果の登熟が向上したことで増収しました。

スライド13は、富山県で行われたアラガーデン・ファームBB515(アラガーデン・ファーム12%とNK化成を配合したNPK=15-1-15)の水稻穂肥試験の結果です。ALAの水稻に体する最適施用時期は出穂の前後だと考えています。極端に遅いと蛋白質含量を上げる可能性がありますから、出穂10日前を標準にしています。

スライド13は、福岡県と富山県で行った小麦と大麦に対する施用試験結果です。概ね増収効果が認められましたが、慣行区に比し30%以上の増収を示す場合もあれば変わらない場合もありました。慣行区の収量をその圃場の持つ潜在的な生産力と考えると、慣行区の収量が低い(地力や生産環境が好ましくない圃場)ほど、ALAによる増収効果が現れやすいと考えられます。麦類は土壌の過湿に弱い作物として知られています。

ALAの施用によって気孔が開くことで蒸散流が増加し、植物体内の水分生理に影響し、過湿に強くなったと考えられます。

左の図は、横軸にALA無施用の収量を縦軸には無施用区に対するALA区の収量指数をとったグラフです。無施用区の収量が低い圃場は、様々な生産環境が悪い圃場と言えます。無施用区の収量が低いところほど、ALAによる増収効果が大きくなっています。ALAの施用によって環境負荷が軽減された結果であり、作物が本来持っている“チカラ”が引き出されたからだと考えられます。



ALA無施用区の収量とALAの施用効果との関係



秋まき小麦への施用モデル(案)

15

- 起生期追肥** 硫安20~23kg/10a + 即溶10kg/10aの混合施用 (N5.6~6.2kg/10a)
または
硫安30kg/10a + 即溶200g/150L/10a茎葉散布
または
硫安30kg/10a + VFF40mL/100L/10a茎葉散布
- 幼穂形成期** 追肥しない場合：即溶250g/150L/10a茎葉散布
- 止 葉 期** VFF40mL/100L/10a茎葉散布
または
尿素2kg + VFF40mL/100L/10a茎葉散布
- 開 花 後** VFF40mL/100L/10a茎葉散布
または 即溶150~200g/150L/10a茎葉散布
低蛋白圃場では尿素2kg可用



大豆への施用モデル(案)

16

- 初期生育確保** 本葉3~5枚の頃
VFF 30~40mL/100L/10a茎葉散布
または 即溶100g/100L/10a茎葉散布
- 収量の確保** 開花期(7月中下~8月中くらい)に1週間間隔で3回茎葉散布
VFF 40mL/100L/10aまたは
即溶150g/100L/10a
※開花始期より開花終期散布が増収効果は高い

大豆の窒素吸収量は、約40kg/10aと言われトウモロコシの2倍以上と非常に多く、開花始期から子実肥大期に7割の窒素を吸収している。
冷夏では初期生育確保が重要で増収の難しい作物とされています。



ビート・ジャガイモへの施用モデル(案)

17

- ビート**
即溶 100~150g/100L/10aまたはVFF 40mL/100L/10aを茎葉散布する
・定植3週間後くらいに1回(即溶なら1,000倍、VFFは3,000倍)
・6月下旬ごろに1回
・7月下旬~8月中旬に2回

ジャガイモ

追肥を行う場合

即溶 10~15kg/10aを株元に施用する

追肥を行わない場合

着蕾期~開花盛期に茎葉散布または土壌灌注、7日間隔で2回

茎葉散布 VFF 40mL/100L/10a (1回当たり)

即溶 100~150g/100L/10a (1回当たり)

土壌灌注 VFF 50mL以上/10aを必要量で希釈する

即溶 200~300g/10aを150L以上の水に溶かす



野菜への施用モデル(案)

18

タマネギ(春まき・移植栽培)

元肥：元肥肥料にアラガーデン・ファーム10%混合

追肥：即溶10~20kg/10a

定植3週間後：VFF 40mL/100L/10a茎葉散布1回

玉肥大始めから首折れまで数回：

VFF 40mLまたは即溶100g/100L/10a茎葉散布

VFF 50mLまたは即溶150~250g/10aを150L以上の水で希釈、土壌灌注

キャベツ・ハクサイ

元肥：元肥肥料にアラガーデン・ファーム10%混合施用 (BB403)

追肥：外葉生育期と結球始め 即溶 (またはBB515) 20kg/10a

茎葉散布または土壌灌注：VFF 3,000倍液または即溶500~1,000倍液
外葉生育期と結球始め、それぞれ2回処理

ブロッコリー

元肥：元肥肥料にアラガーデン・ファーム10%混合施用 (BB403)

1回目の追肥：即溶 (またはBB515) 20kg/10a

茎葉散布・土壌灌注：VFF 3,000倍液または即溶500~1,000倍液
定植20日後くらいから3~5回

本日は貴重なお時間をいただき 誠にありがとうございました

世界初のALA入り粒状肥料アラガーデン・ファームをはじめ、アラガーデン・シリーズをよろしくお願ひ申し上げます。



清和肥料工業株式会社
研究室 真野良平
2023年3月17日作成 ver552

本日は貴重なお時間をいただき、誠にありがとうございました。
本日ご紹介したアラガーデン・ファームは、5-アミノレブリン酸(ALA)というすべての生物に共通の機能性成分を含む新しいタイプの肥料です。この製品は世界初となる優れた機能を有する肥料です。コスモエネルギーグループによる20年以上にわたる精力的なALA研究を基に開発された革新的な肥料です。決して安い肥料ではございませんが、一度使って頂ければ、その高い施用効果を実感して頂けるものと確信致しております。ぜひ、ご検討いただきますようお願い申し上げます。
本製品に関しご不明な点、ご要望等ございましたら、下記へご連絡下さい。可能な限りお応えいたしたいと考えております。

清和肥料工業株式会社
研究室・真野良平
r.mano@shk-net.co.jp
TEL 073-445-2849
FAX 073-445-2875

メモ

メモ